

指導 芝崎厚士先生

駒澤 大学

大学院

グローバル・メディア研究科

グローバル・メディア専攻

令和2年度 修士論文

「香格里拉」・さまよえる「理想郷」

—中国における「シャングリラ」イメージと香格里拉の観光化—

719107

BAI LU

キーワード：「シャングリラ」；中甸；香格里拉；イメージ；観光

---

## 1. 目的

本研究は、「シャングリラ」が国境を越えて中国に移住される経緯、中甸を香格里拉に改称させる理由、現地化された香格里拉の構築過程と香格里拉に付与される意味を考察する。

## 2. 方法

(1)文献研究：小説 *Lost Horizon* の原本・翻訳本、映画館冊子、『申報』から、「シャングリラ」イメージの創造及び近代中国における受容を概観する。それに、『旅行雑誌』、『良友』画報、地方誌・年鑑誌、旅行ガイドブック、または「シートリップ」の「香格里拉観光」コース (2020) から、中甸への認識及びその変遷を考察する。(2)映像分析：映画 *Lost Horizon*、「雲南印象」と「探秘香格里拉」に呈した Shangri-La・香格里拉の様相を解明する。

## 3. 結論

本研究を通して6つの結論が得られる。(1)「シャングリラ」イメージの創造について、「シャングリラ」のモチーフとなる記事の描写範囲を中国のあらゆるチベット地域に定めたにもかかわらず、小説 *Lost Horizon* にはそれをチベットに限定したことから、「シャングリラ」の位置をめぐる論争が始まった。このような「シャングリラ」には、チベットとの関連性を強引しながら、チベット仏教文化の存在が希薄である。一方、大戦後という共通の背景をもち、欧米版と日本語版において、「シャングリラ」は戦争をなだめる理想郷として捉えられた。他方、初の中国語版 (1991) を通じて「シャングリラ」が観光業に繋がれた。(2)「シャングリラ」イメージの受容について、30年代に『桃源艶跡』に訳された映画 *Lost Horizon* が上海に輸入し、中国初の「シャングリラ」イメージは「エロチック」と「戦争のない理想郷」であり、Shangri-La の初訳名は「上格里拉」であった。(3)中甸認識の変容について、国民政府時期に中甸が内憂外患であったが、中共に治めてから、中甸の宗教への認識は政策によって、批判から称賛に変わった。(4)中甸の改称原因及び結果について、ラマ勢力と中央政府との軋轢、中甸「ソンツェリン寺」は中共寄りへの変更や漢語が中甸の公用語となった原因で、中甸とチベット・西康省との差異を招いで文化、政治への配慮で中甸の改称が決まった。(5)中甸・香格里拉観光について、国民政府時期から中甸の対外開放までに中甸がまだ観光地として認識された。文化経済政策の実施は、改称がもたらす利益をめぐる地方政権間の争いを示し、中甸が香格里拉への改称を導いた。今の香格里拉観光には、自然資源、チベット仏教文化と「シャングリラ」文化がある一方、そこに呈した「異」の演出は現実と距離を置かれた。(6)「シャングリラ」・香格里拉への認識は、象徴と現実との間に彷徨えており、経済と政治によって左右されている。

## 4. 主要参考文献

中甸縣志編纂委員會辦公室編 (1991) 『(民国) 中甸縣志資料彙編』  
迪慶藏族自治州概況編写組編 (1960、1986、2007) 『雲南省迪慶藏族自治州概況』  
迪慶藏族自治州人民政府編 (1993) 『迪慶旅遊指南 (The Tourist Guide to Diqing)』